

おやしらずこしらず
親不知子不知

近親に当たる彼が死んだ。葬儀の日家族のだれにも悲しみの色がない。何か変だ。

間もなく遺産争いが始まったらしく、幾十度の調停も不調に終わり、数年かかって裁判で決着がついたようだ。彼が遺した家屋敷、大きくもないが、東京のこと、二億円を超していた。そこには二階に二男夫婦、階下に妻と長男夫婦が住んでいる。長女二女は、母も弟たち一家も立ち退かせて売却、分配を主張してゆずらない。

判決―立ち退かないが、法定分与額を家賃形式で母と弟たち三人が、娘二人に支払う。利子分も上乘せする。不履行の担保として三人の生命保険とその証書を二人が抑える。遺言がなかったための、母子、きょうだい間の引き裂かれた荒廃の姿である。

生前の彼を病院に見舞ったとき、私が見舞うことを近くにいる家族は知っていたのに、だれ一人現れなかった。間もなく病室で独り死んで行つた。

私は、彼の家庭をいわゆるマイホームの見本のように思いこんでいた。家における彼の権威は美風のように存在し、子らはかわいがられ、妻は彼をいつも偉い父のごと

くたてていた。だのにこの結末である。私の不審にその姉が説明してくれた。

「彼はいつの間にか暴君のようになっていた。遅番で夜帰宅しても、「もうあいつが帰って来たか」と、子供たちはあいさつもせず居間を引きあげていくしまつ。父に對して、あいつ、妻もすっかりそんな子らに同調していた。たしかに暴君には遺言を必要としない。

私の高校時代、彼の新家庭に泊まった折、夜勤明けの彼の朝食には卵が余分に付いていた。私にはなかったのに。ボタンの掛け違いがそのころから始まっていたのだからか。

(一九八八年十月三日)